下大夫貧困の文樂座に在つて、いさゝか素質に惠まれた部類に屬する人である。然し素質はあくまで素質であつて、それを磨き上げずしては完成品とはなり得ない。材木をいくら積上げて見ても、それを削り、組立てなければ家にはならない。伊達大夫は放り出された材木であるに過ぎない。それは家になり得る。然しそれ自體決して家ではない。

伊達大夫は義大夫節を知らない。義大夫を知り、學び且演練するの途を彼は今後心掛くべきである。それが幾百行の慚愧の涙よりも優れた亡師への回向となるであらう。（一六、四、三）

駒大夫の死

本誌同人　武智鐵二

七代目駒大夫が死んださうである。私は元來彼の藝を好まなかつた。それは彼が文樂現下唯一の業師の手だれであることは認める。然し、その業を以てしてさへ猶蔽ひ難き非力と語り口につき纏ふ下品さと、業から來る一種の小手先藝——藝術的大燃燒力の不足と要するにあの端唄淨瑠璃的なものに世紀末的なものを感じて、どうしても好きになれなかつた。彼の得意の世話物にあつても下卑な情話調のみをしか感得しえなかつた。ところで、私が彼を見直したのは昨年東京で演ぜられた「封印切」からであつた。彼はそこで始めて大藝術家としての風丰を現した。そこには生きた人間の息と肉とがあつた。彼の非力は依然淨瑠璃を片輪にしてゐたが、それを踰越えて打つて來るエスプリが、そこにはあつた。エスプリ、それは藝術家を藝術家たらしむる最大最終の要素であり、藝術を人間に橋渡す棧であるのだ。義大夫を例に採つて、技巧的にも肉體的にも決して古靱大夫や駒大夫に劣らず否幾多の點で立優つてゐる織大夫をして、遂に此の兩者の前に膝を屈せしむるものは、このエスプリ、ユマニテの缺如なのである。越えて昨年末の文樂座に於ける「壺坂」に於て、駒大夫は神技を發揮した。彼は「テチン」を語つた。由來私は「壺坂」を好まない。然しその下らないお里澤市に人間の肉付けをし、無限の同情を寄せしめるには「テチン」を語るの他はない。日本傳統藝術の分解式、方程式式惡表現を捨て生きた全體的表現に依らんとした大團平の主張が、今日駒大夫によつて實現、まさに實現されたのだ。大隅大夫の昔は知らず、古靱土佐の壺坂をひつくるめて、駒大夫の「テチン」に及ぶもの

は一人もなかつた。彼の一生は實に「テチン」に懸けられた一生であり、この一言を語るための六十年であつたのだと私は思ふ。

思へば恐ろしい藝道である。（一六、四、一五）

豊竹巌大夫追想

本誌同人　内田富太郎

五十義會春季大會の二日目、春雲暗澹たる帝大病院の一室に豊竹巌大夫が遂に永眠した。

去年東劇十二月興行「賀の祝」の床淨瑠璃を最後の舞臺として。裸言すれば、故人は生前隨分敵の多い人だつたが、私は妙に鬪爭的な强鋭さを持つ人間性に魅き付けられた。一部の人から毛嫌ひされてゐたあの鼻張りの强さも今にして思へば、江戸つ子氣質を潜在させてゐて面白かつた。それと新派の巨星亡き伊井蓉峰にどこか似てゐたことも懐かしめた一因である。

○

始めて私が巌大夫に逢つたのは肌寒い去年の二月のある夜、神田錦橋閣の素玄淨曲研究會の感想交換會で、岡田博士に紹介された時だつたと記憶してゐる。

如才のない故人は若輩な私を捉へて

「何か内の雜誌にも書いて下さい」。

と例のテキパキした調子で浴びせかけた。齒切れのいゝ快調につい引き込まれて「えゝ」と私はモゴ〳〵返事したのである。

彼は其の晩、素玄會の爲めに猿滅の絃で「鰻谷」を語つた。それを先輩河野國聲氏が江戸前の「妻八」だと適評した。巌大夫と「鰻谷」これは妙に印象に殘つてゐる。

青年歌舞伎が解散する少し前のことだからモウ四五年だつたと思ふ。新宿の第一劇場で訥升のお妻、我當の八郎兵衛で「鰻谷」を出した。

樂に近い某日、巌大夫は新橋演舞場の或る舞踏大會と掛持してゐた爲めに、演藝場の時間の狂ひから青年歌舞伎の開幕時刻に間に合はず大穴を開けて了つた。これが樂屋の問題となつて我當、勘彌の若手連が憤激の餘り結束して、松竹に青年歌舞伎と巌大夫の絶縁を迫つた。幸ひに、パトロン格の井上松竹重役と演舞場の故川村社長の調停斡旋で短月の謹愼で巌は青年歌舞伎へ復歸出來た流石の彼もこの時は實に是順に非を認めて鬪志を現はさなかつたらしい。

其の曰く付の「鰻谷」はこれまで聽いた彼の床語り物中で、私には一番印象深かつた。巌の持つ根强い精力的